

平和の大切さ

～戦争体験を聞く～



田中 十三子さん
・昭和13年生まれ(87歳)
・終戦を迎えた場所
富土見市水子

私は、旧水谷村で生まれ、6歳の時に終戦を迎えました。
戦時中はサイレンの音、空襲警報で夜もおちおち寝られない日々でした。光が漏れると爆弾を落とされるからという事で、毎晩、電球に黒い布を被せて寝る生活をしていました。
空襲警報が鳴って敷地内にあった防空壕に何度も逃げ込みましたが、その時、空の上から火の玉

がバカバカ落ちるのを見ました。水谷村にも爆弾が落ちて、そこにあった木が吹っ飛んで隣の田んぼに丸ごと移ったのを見て驚くと同時にとても怖かったのを覚えています。
家は農家だったので、小さいころから田んぼや畑を手伝っていました。田んぼは常に水が腰位まであったから、木の舟を押して田んぼの中に入っていて、稲を刈って束ねて舟に載せ岸まで運び、リヤカーで運んで...と全て手作業でした。
家を手伝いながら、小学校には防空頭巾を被り、草履を履いて通いました。雨の日は草履が濡れちゃうから裸足で行ったこともあります。裸足だと濡れた葉っぱに虫がいて気持ちが悪く、冬は足が冷たくて痛かったですね。学校にはさつまいもを

弁当箱に入れて持って行ってました。少ししたらお米と麦、梅干し一つを入れた弁当になり、3年生くらいになったら家で飼っていたニワトリの卵を使っていた卵焼きが加わり...と少しずつ暮らしが良くなっていききました。でも、肉や魚なんて食べられなかったですね。
小学校卒業後は和裁の学校で和裁を習い、15歳で東京のお米屋さんに住み込みで働きに出ました。が、毎日たくさん人の食事の用意と洗濯板を使って大量の洗濯物...とても大変でいつも泣いていましたね。
現代は、何かを調べるにも簡単にスマホで調べられるし、便利なものがたくさんあって、自分の頭を使って考える機会が減っていますよね。それらが無くなった時は



小林 セツさん
・昭和10年生まれ(91歳)
・終戦を迎えた場所
茨城県下妻市

私は、茨城県の下妻で生まれ、育ちました。父は瓦屋を営んでいましたが生活は苦しくて、

どうなるのだろう...と考える事があります。世界を見渡しても今、何が起きるか分からない時代ですからね。次世代の人たちには、何かあったとしても揺るがない生きる力や生活の知恵や工夫を身につけて欲しいと思います。

戦争を体験された方にお話を伺いました。紙面の都合上、お話のすべてをご紹介することはできませんが、多くの貴重な話を聞き、改めて命の尊さ、平和の大切さ、ありがたさを実感しました。
(担当/新井紀子、渋谷真実、小山由佳、北島由紀)

私は小さい頃から近所の赤ちゃんの世話や料理など色々な手伝いをしながら暮らしていました。
母は喘息を患っていたので、4歳の時には父と10日ごとに、3、4キロ先の病院まで歩いて薬をもらいに行ったのを覚えています。
その1年後くらいに両親が離婚して、父と兄弟だけになりましたが、貧しくて学校には行けず、近所のお家で赤ちゃんのおむつを洗って干したりする代わりに近所で大根飯などを分けてもらっていました。
6歳の時に戦争が始まりました。家が飛行場の近くにあってからしょっちゅう10機くらい多くの飛行機が飛び交っていて、空襲警報のサイレンもひっきりなしでした。そのたびに防空壕に入るんですが、中はひざ上まで水が溜まっていて冷たくて暗いし、怖くて怖くて...
あとは、東京大空襲の

時は、東京の空が真っ赤になっていてのを見てとても怖かったです。
その頃、食べ物や生活用品は、配給制になり、米は農家のお家にしか無かったから小麦を臼で挽いてなめたりしていました。石けんも少しだけ、シャンプーなんて無いし、ゴエモン風呂で燃やすわからも足りない状況だったから、髪だけでなく全身にシラミが湧いて大変でした。
衣服も年中一緒にボロボロのものを着ていました。友人たちはお盆や正月には服を新調してもらったり、時々来る食べ物の露店で美味しそうな食べ物を買ったりして、それを食べるたびにうらやましかったです。
13歳になったら奉公で働きに出たので、1年に1回しか親に会えなかったりその後も苦勞が絶えなかったですが、一日一日を一生懸命働いて過ごしていました。



岡本 全子さん
・昭和7年生まれ(94歳)
・終戦を迎えた場所
東京都千住

今は公民館のイベントなどにも積極的に参加してなるべく色々な方と交流して日々を楽しんでいます。
今は東京の千住で生まれ、戦争が始まった9歳の時から終戦までの4年間を千住で過ごしました。戦時中は、夜になると毎晩のように防空壕に入り、「今日も生きられたな」と子どもながらに常に生死を感じる毎日でした。近くで毎晩のように空襲で真っ赤に燃える光景もよく覚えています。

今思うと母はさぞ辛かったでしょうね。知らない間に始まりいつ終わるかわからない不安の中、娘に「大丈夫、守ってあげるよ」とも言えない状況だったのですから。
昭和20年3月10日の東京大空襲で家が焼けて無くなってしまったので、先に疎開していた父と妹に再会した時、父が「みんな無事で良かった」と涙を流したことをよく覚えています。
その後は世田谷の親戚のお家にしばらくお世話になった後、当時13歳で千葉県に家族で疎開しました。片道5キロ歩いて女学校に通いましたが、おかげさまで学校は楽しかったもので長い道のりも苦では無かったですね。
ただ、食べ物は無かったのだからお腹はペコペコでした。お昼が茹でたナス一つだけ、さつまいもの芽が出てスカスカになったものだけだった時もありましたから。学校帰りは木の実など食べ

れるものは何でも食べましたよ。今の人は「飢えですからね」「食べたくないから食べない」ではなく当時は、食べ物がないから「食べたくなかった」「食べたくても食べられない」状況なので、全然違いますよね。
戦後も生活が大変なのは変わらなくて、戦時中と変わったことといえば、部屋にランプ一つしか付けられなかったのが、石油ランプをいくつか付けられるようになって勉強がしやすくなった事です。うか。ただ、教科書も一人一冊なんて無かったから、紙に書き写して使ったり、色んな工夫をして17歳で卒業して東京のお家に戻りました。
知らないうちに庶民が引っ張り込まれてしまうのが戦争です。悲しい思いをする人は偉い人じゃなく何も知らない庶民なんです。そんな庶民が犠牲になる戦争は二度として欲しくないです。